

各 位

2026 年 8 月 4 日
株式会社 山と溪谷社
<https://www.yamakei.co.jp/>

“冒険”を通じて、自分の可能性を拓く——ヤマケイ文庫『荒地で生きる』発刊！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、ヤマケイ文庫『荒地で生きる』（角幡唯介：著）を発刊しました。



「なぜこんなに角幡本は面白く、そして心を打つのだろう。いや、撃つのだろう。」東畑開人氏、推薦

「冒険者は脱システムすることで、自力で命をコントロールする自由を経験する。自由であることには不快で面倒くさい面があるが、一方で圧倒的な生きている実感を手にすることもできる——」。

早稲田大学探検部の部室で「三原山計画」に出会ってから国内外でさまざまな冒険と旅に挑み続ける著者が、歴代の探検家の記録や哲学書を引きながら、冒険とは、生きるとは何かを考えます。

解説／東畑開人

◎内容

世界の可能性を拓け／冒険とは何か——本多勝一の冒険論／人類史上最高の冒険とは？／「愚の骨頂」と誰もが思った／神話における脱システム／英雄の冒険を分析する／システムとしてのコスモス／現代はなぜ冒

険が難しくなったのか／人間の世界からオオカミの世界へ／服部文祥のサバイバル登山／極夜の探検／冒険における自由／人はなぜ冒険をするのか／単独行の理由／なぜ冒険を書きのこすのか など

2018 年発刊の『新・冒険論』（集英社インターナショナル）を加筆修正・改題のうえ、解説と口絵写真を追加して文庫化。



グリーンランド北部のワシントンランドにて（北緯81度付近）。
 グリーンランドとカナダ・エルズミア島をへだてるケネディ海峡を北極海まで押しをしながら犬車で北上した。
 2024年4、5月。

©西條唯介

自分でもナンセンの立場だったと考えると、下手に極地の旅のことがわかってい
 るだけに、私には冒険がひっくり返るような恐怖感しかおこえない。
 船を離れて一カ月近く大船で北上を北進したナンセンとヨハンセンは、北緯八十六
 度十分という当時の人類最北到達記録を樹立すると、さすがに極点到達は不可能
 と判断し、そこから陸地をめざすことにした。しかし彼の目の前はまた、言葉の真
 の意味で前人未到である北極海の氷原が延々とつらなり、それを千キロ近くわたつ
 て突っ切らなければならない。
 海上の水はねに濡れ動き、いつ開けるかわからない。極限的な環境の中、二人は
 いくつもの巨大な氷原を越え、水が開いてあらわれた海岸にカヤックを浮かべ、食料
 が乏しくなるとイヌを殺して餌えもしのぎ、襲撃してきたシロクマやセイウチをまき
 うちにして食料を確保した。現実とは思えない過酷な世界。
 自然環境だけではなくナゲーションのむずかしさが彼らの行為の難易度をさらに
 高めていた。GPSを通信手段がないので、現在位置は六分儀で太陽を天測して決定
 しなければならぬのだが、GPSとは違って天測にはかなり誤差がつきまとう。
 なかなか陸地が見えないことにナンセンは開立ち、天測結果が誤っているのではない



矢印はナンセンの経路。
 ①ワム号の漂流が始まった北緯78度付近。
 ②ナンセンとヨハンセンが船を離れた地点（1895年3月14日）。
 ③二人がフランツェルフ諸島に上陸した地点（1895年8月14日）。
 ④ナンセンがジャコブソン船医と出会ったフロラ岬（1896年6月17日）。

ドに説明をあたえようとした。
 冒険の現場はそこはかとなく死の匂いに満ちあふれている。天候の急変、疲労の蓄
 積、わずかな油断、一瞬の判断ミス、滑落、雪崩……現場が知られていない環境で
 あるだけにふとした瞬間が思わぬ危険につながる。もちろん死にたくないが、死に
 たくない事態なのだが、ただ死の危険を感じられるから人は冒険の現場に惹
 きつけられる。ジェットコースターのように守られるスリが危険であるように、
 冒険者は死の危険がまったくないところに魅力を感じないだろう。
 冒険者が死に解れたのは、そのすぐそばで自分の生き活きたる感覚をもつこ
 とができるからである。生きている感覚は死を意識することでより鮮明になり、生き
 生きと感動する。ところが現代の都市における文明生活では、このような自分が生き
 ているという感覚、あるいは死を見つめる瞬間がほとんど失われている。死は誰に
 も不可避的におとずれる最後瞬間であるにもかかわらず、誰も本能的に避けた
 い事象であるため、生活が巧妙に隠され、見えなくされてしまっている。
 死が見えなくなっている現代人の生は活性化される機会ももうない。だからと
 いたずらに時間の引きのばされた命の迎のなき状態を強いるようになった。
 冒険は、こうした生と死に対する、一種の不感症に陥った現代人の精神に、死の不安と

の命をつなぐ、その時間をかきためるためである。自由な要素の少ない行為は、いか
 に壮大であっても私にはまったく面白そうに思えない。宇宙飛行士の活動は私にはあ
 まり魅力的に映らないが、それは宇宙飛行士が宇宙センターの指示にしたがって任務
 を遂行しており、自由があまりにも低そうに見えるからだ。
 人はなぜ冒険をするのか
 冒険者は脱システムすることで、自力で命をコントロールする自由を経験する。自
 由であることは不快で面倒くさい面があるが、一方で圧倒的な生き生きする感覚を手
 にすることもできる。この感覚は非常にすばらしいものがあり、一度経験するとシス
 テムの内側の日常に満たされたい空虚感をおぼえることになる。登山者が何度も山に登り、
 冒険者が飽くことなく荒野をめざすのはそのためだ。
 生きること大変だが、だからこそよここしきも得られる。この自由における矛盾し
 た感覚こそ、冒険者が何度も冒険の現場に向かひつづける真の要因がある。
 人はなぜ冒険するのかという問いに対して、若い頃の私は死という概念をテーマに

○著者略歴 角幡唯介(かくはた・ゆうすけ)

極地旅行家・作家。1976 年、北海道芦別市生まれ。早稲田大学卒。同大探検部 OB。2002 年～03 年冬に長い間「謎の峡谷」と呼ばれていたチベット、ヤル・ツアンポー峡谷の未踏査地域を単独で探検・調査した。2010 年、二度のツアンポー探検を書いた『空白の五マイル』で開高健ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞。『アグルーカの行方』で講談社ノンフィクション賞受賞、『探検家の日々本本』で毎日出版文化賞書評賞受賞。著書多数。近著に『43 歳頂点論』『どうせ死ぬなら北極で』がある。近年は、グリーンランド・シオラパルクと日本との二拠点生活を送りながら毎年、2 ヶ月にわたる犬橇長期旅行に出ている。

○書誌データ

書名:ヤマケイ文庫『荒地で生きる』

著者:角幡唯介

発売日:2026 年 8 月 4 日

定価:1320 円(本体価格 1200 円)

仕様:文庫判、264 ページ(カラー口絵)

<https://www.yamakei.co.jp/products/2825050180.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：塚本由紀）を持株会社とするメディアグループ。「IT・デザイン」「音楽」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：綿

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>